

令和3年度

連携活動記録報告書

VOL. 12



令和4年3月

山形大学附属学校

目次

はじめに	・・・・・・・・ 1
I 連携活動の記録	
令和3年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題	・・・・・・・・ 3
令和3年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題	・・・・・・・・ 5
令和3年度の活動を振り返って	・・・・・・・・ 6
1 幼小中連携	
(1) 幼小連携	・・・・・・・・ 12
(2) 幼中連携	・・・・・・・・ 17
(3) 小中連携	・・・・・・・・ 19
2 特別支援学校連携	・・・・・・・・ 20
II 山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程	・・・・・・・・ 26
III 資料	
附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める	
部会に関する申し合わせ	・・・・・・・・ 30
附属学校研究・連携推進委員名簿	・・・・・・・・ 32

はじめに

山形大学附属学校では、4つの学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の2つの部会を設置している（もう1つの「共同研究推進部会」については『共同研究報告書』を参照されたい）。本活動報告書は、2021年度の山形大学附属学校園における「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものである。

山形大学附属学校では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、4校園の教員が互いの教育現場を参観し、意見や情報を交換する中で、それぞれの教育目標に応じた特徴を持つ各学校園の教育実践から、附属学校園における新たな連携のあり方を意識した教育方法の検討に取り組んできた。また、山形大学附属学校には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成 23 年度から）及び英語教育コーディネータ（平成 27 年度から）が配置されており、「まっなみ学習支援室」（平成 24 年設置）とともに、4つの附属学校園にわたる多面的な連携を担い、教育支援を行ってきた。

第4期中期目標・中期計画による教育がスタートする中で、令和4年度から次の5つの教育活動を、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校が一体的に、連携・協力しながら進めていくこととしている。

- ① ICTを活用し探究的に学ぶ力を高める教育
- ② 郷土愛を基盤に「SDGs」（持続可能な開発目標）を踏まえた教育
- ③ グローバル化に対応できるコミュニケーション能力（英語力等）を高める教育
- ④ 共生社会を築くインクルーシブ教育
- ⑤ 個性を尊重し伸ばす教育

幼稚園での「遊び込む教育」（探究の基礎）は、小学校で育まれる地域に根ざした探究的な学びへ、さらに、中学校ではより広く世界に視野を広げつつ、関心領域の深い理解に届く探究的な学びへと展開され、その先に高等学校や大学における主体的に探究する学習者に成長していくことが期待される。また、幼稚園から始まる共同生活において困難を抱えがちな子どもたちの支援においても、多様性を許容するインクルーシブ教育の観点から、小学校、中学校と進む中で、学校全体で子どもたちのより豊かな成長を促すようなしくみを構築することが求められている。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いです。

令和4（2022）年2月

山形大学附属学校運営部長 中井 義時

I 連携活動の記録

令和3年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その1

附属小学校長 樋口潤一

メンタルケアコーディネータ（中学校籍 教諭） 鎌田 弘子
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍 教諭） 早坂 美紀

配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う

- ◎教育相談と特別支援教育において、校種間の連携及びその一貫性を図る。
- ◎附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。
- ◎附属学校園全体の心の問題を抱える幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。

主な職務

- ◎幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
- ◎該当する幼児児童生徒への直接の支援・指導
- ◎学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
- ◎各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
- ◎まっなみ支援室における支援員への専門的な助言及び教職員の資質向上を促す研修実施

今年度（配置11年め）の基本的な考え方

【目標】

- ・早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図ること。
- ・各校園でコーディネータを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図ること。
- ・個に応じた支援のあり方（当該児童生徒のみならず保護者支援や担任支援も含む）を探究すること。
- ・年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決に向かっていくこと。
- ・まっなみ学習支援室の支援員を適切に活用し、別室での学習・取り出し指導の充実を図ること。

【役割】

- ・附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつないでいく。
- ・各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導支援を行う。

【具体策】

- ・各校園の状況を把握し、幼児児童生徒に係る情報をつなぎ、校園間の指導支援の一貫性を担保する。
- ・先進的・専門的な情報を収集・整理し、各校園の教員への情報提供及び研修等を通して指導する。

今年度の成果

教育相談と特別支援教育における校種間の連携及び一貫性が強化された。

→幼稚園・小学校・中学校で様式を統一した「個別の教育支援計画」を用いて、より効率的に情報共有を図ることができ、適時・的確な個別対応を行うことができた。

→保護者面談の計画的・継続的な実施、関係機関との連携窓口としての機能が定着してきた。

- ◎コーディネータ及び支援員が幼稚園と小学校の両方に勤務し、丁寧な幼児の実態把握と情報共有を行うことで、幼・小の円滑な指導・支援の連携を一層強化することができた。
- ◎指導対象幼児・児童・生徒について、特別支援学校コーディネータによる WiskIVの実施や分析も含めたアセスメントを行うことで、よりの確な支援を行うことができた。
- ◎校長・教頭・教務主任・まっなみ支援室長・養護教諭・支援員との「ランチ・ミーティング」を毎日行うとともに、コーディネータやSCも含め状況に応じたケース会議を適時開催できたことで、迅速かつ的確な情報共有が図られ、未然防止と早期対応が可能になり、組織的支援の一層の充実を図ることができた。
- ◎教育課程説明会や懇談会等（令和3年度は動画配信）で、まっなみ支援室の機能について説明を重ねることで、保護者へのより広い周知が図られ、相談を受けることが増えてきている。
- ◇コーディネータを講師として、ソーシャルスキル・トレーニング等の研修を実施しており、今後も継続して研修を行うことで、計画的・継続的に教員の資質・能力向上を図っていきたい。

令和3年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その2

附属小学校長 樋口潤一

英語教育コーディネータ（附属小学校籍 教諭） 佐藤 大将

配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
- 附属学校園全体の英語教育における幼児児童生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
- 異学校種間の英語教育指導のあり方に関し、地域のモデル的实践を行うとともにその周知を図る。

主な職務

- 大学教官との連携をとりながら、附属学校全体の英語教育における幼児児童生徒への支援・指導の充実に向けて、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
- 小学校における外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携し学習指導やその補助を行う。
- 英語教育の充実強化・高度化に対応するための指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
- 附属学校全体の英語教育とその支援・指導を担当する教員として、幼小中一貫教育を支える。
- 附属幼稚園での英語遊び等を試行し、幼小連携による具体的な実践を促進する。
- 大学・学部等における研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質の向上に努める。

今年度（配置7年め）の基本的な考え方

【目標】

- 学習指導要領に基づく外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定・体制整備に向けた情報収集や本校教員の資質向上を図るための情報提供
- 附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続に資する連携強化

【役割】

- 学級担任やALTと連携して、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
- 県や市の研修を受けるとともに、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。
- 附属中学校英語科の授業づくりへの支援（TTでの授業参加）
- 附属小学校外国語科及び外国語活動への附中英語科教員の参加をコーディネート

【具体策】

- 5～6学年における外国語科（週12コマで年間420コマ）を担当する。
- 3～4学年における外国語活動（週5コマで年間175コマ）を担当する。
- 学習指導研究協議会等において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。
- 学習指導要領の趣旨及び内容を踏まえた年間指導計画を策定する。
- 研修や参観した公開授業等の情報を整理し、校内研修会等で報告する。
- 毎月月曜日に附中英語科でのTT指導後の振り返りと打合せを行う。

今年度の成果 →年間指導計画に基づき、PDCAを意識して、今年度も加筆修正しながら改善を進め、新学習指導要領の全面実施に向けた取組の一層の充実を図ることができた。
→学習指導研究協議会及び秋の研究協議会における授業提案を、動画配信やインターネット双方向通信システムを活用しながら行うことで、小学校外国語科のモデル実践を、幅広く県内外に示すことができた。
→全国英語教育研究大会山形大会（11月）において授業提案を行うことで、山形県全体はもとより全国に外国語教育の充実と具体的実践に資するモデルを示すことができた。
→山形大学附属学校園での実績に加え、全国英語教育研究大会での優れた実践及び提案等を評価され、令和3年度文部科学大臣優秀教職員表彰を授賞した。

令和3年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題

附属小校長 樋口潤一

設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- ◎附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実と体制整備の推進を図る。
- ◎附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。
- 県内小学校の発達障がい児等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC（必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー）、管理職（校長・教頭）と連携して主に以下の職務を行う。

- ◎学習面、生活面での支援（行動観察、TT指導、取り出し個別指導、諸検査の実施）
- ◎メンタル面での支援（教育相談、アドバイス等）
- ◎保護者との面談、教育相談
- 研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

支援室の運営

- ・室長：小学校まつなみ支援室長 長岡 初美 教諭（附属小学校在籍）
- ・副室長：特別支援教育コーディネータ 早坂 美紀 教諭（附属特別支援学校在籍）
：メンタルケアコーディネータ 鎌田 弘子 教諭（附属中学校在籍）
- ・支援員：小学校まつなみ支援室支援員 小林明日香 支援員（週5日5h勤務）
- ・スーパーバイザー：佐藤 宏平氏（山形大学地域教育文化学部准教授）

今年度の成果

- 附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への継続的な支援が充実した。
- 心理検査等による客観的なデータの収集・活用など、専門的な支援が可能になった。
- 幼稚園児と小学校低学年への早期発達支援及び、支援員の幼児児童への個別的・計画的・継続的支援が有効に機能した。

- ① コーディネータの専門性を生かしたアドバイスを適時に得ることができた。
- ② 個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。
- ③ 附属学校園教員の特別支援教育に対する意識が高まり、各教員がいつでも相談でき組織的支援が受けられるという安心感が広がるとともに、各学年・学級における特別支援教育力の向上につながった。
- ④ 来室時に限らず、教室や園に出向いてのアセスメントや支援を行うことにより、支援室の学びと学級での学びのつながりを強化することができた。

今後に向けて

- ① 附属学校園教員の特別支援教育力の更なる向上をめざし、教職員の研修及び保護者への周知等を計画的・継続的に実施する。
- ② 支援児童に対する切れ目のない一貫した支援ができるよう、幼・小・中の連携を一層強化していく。

令和3年度の活動を振り返って

メンタルケアコーディネータ 鎌田 弘子

1. 活動報告

(1) 特別支援教育コーディネータ及び附属小学校の教育相談担当との連携

- ・ 新入生の小学校時の生活の様子や人間関係、これまで行ってきた支援について情報提供をいただいた。
- ・ 小中学校に兄弟姉妹が在籍している生徒について必要に応じて情報交換を行った。
- ・ 中学校の生徒の様子についても情報提供を行った。

(2) 附属幼稚園との連携

週2日、園児とともに様々な活動を一緒に行いながら園児理解に努めた。また、担任と情報交換を密にししながら支援を要する園児への保育支援にあたった。

(3) 中学校スクールカウンセラーとの連携

- ・ カウンセリング後、相談者から了解を得た内容を聞き取り、担任に伝達した。
- ・ 4月に中学1年生を対象にスクリーニングを実施。授業中の生徒の様子を観察し、生徒への支援方法について助言をいただいた。
- ・ 1クラスずつ講話をしていただいた。内容は1学年「思春期の心について」、2学は「自分の心を守る方法」、3学年「受験期の心の整え方」
- ・ 教育相談部会において生徒の情報交換の際、特別な支援が必要な生徒への具体的な支援について専門的知見からご指導いただいた。

(4) 中学校養護教諭との連携

- ・ 毎日、生徒の情報交換と今後の対応について相談した。
- ・ SCとの情報交換を通して、今後の生徒への対応について相談した。
- ・ 学習室の運営について相談しながら進めた。
- ・ 教育相談・発達障害について助言をいただいた。

(5) 中学校の学級担任・教科担任との連携

- ・ 「スズキ校務」を活用し、その都度生徒の様子やカウンセリングの内容を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。
- ・ 担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、今後の対応について検討した。状況に応じて校長や教頭に報告し、SCに繋いだりケース会議を開いたりした。
- ・ 担任会に参加し、Q-U結果を基に生徒の支援策について検討した。
- ・ 学級全体や特別な支援が必要な生徒への支援方法について確認し、指導にあたった。
- ・ 学習室の生徒のために授業内容や学習支援について確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりするなどした。
- ・ 教育相談アンケートを受けて、生徒の面談を行った。

(6) 教育相談部会の実施(中学校)

- ・年度当初に教育相談の年間計画を作成し、教育相談アンケートのみならずSC講話やエンカウンター（SEG）、ソーシャルスキルトレーニング（SST）なども計画的に実施できるようにした。
- ・部会を月2回設け、生徒の情報交換を行い、必要に応じて支援策の検討を行った。
- ・ICTを活用した。
- ・教育相談アンケートを年5回実施し、生徒の現在の状況や悩みなどを把握し、面談等で対応できるようにした。
- ・Q-U検査を年2回実施し、Q-Uの結果を受けて分析方法を提供し、個々の対応について検討した。
- ・全職員を対象に生徒理解研修会を実施し、今年度はSCの伊藤洋子先生から、「自死予防講座～生徒の死にたいに向き合う～」についての講話をして頂いた。

(7) 不登校生への対応(中学校)

- ・ケース会議を実施し、生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
- ・担任から家庭訪問や電話での様子を聞き、対応策を検討した。
- ・ICTを活用して始業式などの儀式や生徒の活動を配信できるよう環境を整えた。

(8) 学習室で過ごす生徒への対応(中学校)

- ・個別に月目標や具体的な取り組みを確認し、毎週、時間割を作成して目標に向かって学習できるように環境を整えた。
- ・必要に応じて生徒と面談を行い、心配事や困り事がないか確認しながら、適宜対応した。
- ・学習室で過ごす生徒が授業に入れるように教科担任と連携して学習支援を行うと共に、SEG、SSTを行い、人との関わり方について学ぶ機会を取り入れた。
- ・ICTを活用して生徒が学習室にいても授業に参加できるように環境を整えた。

2. 成果と課題(成果○, 課題△)

○小学校からの情報提供を基に、特別な支援が必要な児童の様子やその支援策について、児童理解に努めることができた。

○今年度新たな試みとして、小中学校でつながりのある支援になるよう、特別な支援が必要な児童の保護者を対象に中学校の養護教諭と共に春休みに面談を行い、中学校進学に伴う心配事や困り事を聞いたり中学校への要望などを確認したりした。その後、面談内容について1学年の担任会で報告し、新入生の情報を繋ぐことができた。

○中学校ではICTを活用して不登校生徒や学習室の生徒が授業や行事に参加することが可能となった。今後も担任や教科担任と連携して情報環境作りに努めていきたい。

△中学校の学習室を利用する生徒が増加したことで、生徒一人一人の学習進度や情報把握が煩雑になり十分に対応できないこともあった。また、生徒の引き継ぎファイルを活用しているものの、それだけでは不十分な時もあった。今後、生徒一人一人が安心して学習室で過ごすことができたり、教室復帰につながったりできるよう、学習室に専属で担当者があることが望ましいと考える。

△小中学校のつながりのある支援をより一層充実させていく必要がある。高学年の児童と関わる機会を増やすことで児童理解を深め、児童が中学校に進学した際、少しでも安心して学校生活を送れるように支援体制を整えていきたい。

令和3年度の活動を振り返って 2

附属学校特別支援教育コーディネータ 早坂 美紀

1 主な活動の報告

(1) 教育的支援

今年度は、幼稚園、小学校において、学級や個人に対する教育的支援を行った。

幼稚園では、年少、年中での支援が多かった。特に年少では、準備や片付けにおける個別の支援だけではなく、遊びの中で友達とのかかわりを見ながら、いざこざに対する仲介をしたりした。園児のやりたい思いや友だちの思いを代弁しながら、お互いの気持ちが伝わるよう支援した。次の活動に向かう際、片付けたり切り替えたりすることが難しい園児については、育ちを見ながら少しずつできるようにかかわってきた。担任や養護教諭、家庭との情報交換を行い、支援の仕方を共通理解することを大切にしてきた。

小学校では、昨年度に引き続き個別の支援の必要な児童に対し、学校全体とまつまみ支援室の教員・支援員とが協力してサポートできるよう、年度始めに教員の時間割を作成した。学級を巡回する中で、特に算数の学習支援のサポートが必要な児童も数名見受けられた。担任と相談し、定期的に算数の時間にサポートできるよう工夫した。また、保健室を利用しながら登校している児童については、教室と本児、担任と本児をつなぐサポートをした。教室に入ることが難しかった児童も、支援員やコーディネータと別室での学習をしたり、担任の配慮で数人の友だちと一緒に時間を過ごしたりしていく中で、少しずつ教室での学習にも足が向くようになった。その他は、全体を巡回する時間を設け、学級の雰囲気を見たり、個別に配慮の必要な児童を確認したりし、必要があれば、担任から情報を得たりしながら、直接的な支援につなげたりした。

まつまみ支援室において、個別の指導をしている児童については、個別の課題にそった SST (ソーシャルスキルトレーニング) を行った。不安を抱える児童については、新たに放課後に定期的な「お話タイム」の時間を設けてきた。初めは学校生活に対して様々な不安があった児童だが、日々の担任や友だちのかかわり、学校生活への慣れにより、保健室利用がなくなったり、不安を口にすることがほとんどなくなった。時々、友だちとのトラブルで落ち着かなくなる児童もおり、その際は教室から離れて児童の話を聞いたり、落ち着く時間を取ったりする支援をしてきた。

(2) ケース会や情報共有

今年度は、幼稚園、小学校でのケース会にかかわった。幼稚園では、主に切り替えの難しい幼児、支度や準備が定着せず、気持ちが向かない幼児に対するケース会に参加し、担任や養護教諭と一緒に具体的な短期目標を考えてきた。また、各学年の気になる幼児について語り合う会議にも参加し、課題を把握することができた。

小学校では、昨年度に引き続き、管理職や校内の特別支援教育コーディネータ、養護教諭、支援員等と定期的にミーティングを行い、個別の支援をしている児童、気がかりな児童や学級についての情報共有を行ってきた。年度初めや年度途中の個別の教育支援計画作成、個別面談にも、必要に応じて参加させていただいた。本人の願いや

保護者の願い、担任の願いを一緒に確認していくことで、課題整理ができた。合理的配慮については、保護者と学校との思いをすり合わせていくことで、保護者と同じ方向で支援にあたることができた。

(3) まつなみ学習支援室および支援員等との連携

幼稚園の保育支援は、引き続き支援員とメンタルケアコーディネータ、附属学校特別支援教育コーディネータ3名が交代で勤務しながら行っている。小学校においては、支援員と附属学校特別支援教育コーディネータが交代で勤務し、かつ週に1回は同時に勤務する体制である。支援の必要な幼児、気がかりな幼児について、担任、養護教諭との情報共有を行い、その後の指導・支援に活かすことができている。

小学校のまつなみ学習支援室は、不登校や放課後学習支援の必要な児童に対するサポートから始まったが、現在は必要な支援も多様になってきている。母子登校、保健室登校、学習支援、対人関係、社会性への支援と様々である。一昨年からは、附属学校特別支援教育コーディネータや支援員が決まった時間サポートに入ることができるよう、時間割を作成して教職員へ伝えている。

(4) 保護者支援

幼稚園は、日々の情報や懇談等で得られた情報を定期的に共有し、1月には、年中の保護者向けにこれからの生活を見据えた園生活について、お話をする機会をいただいた。年長、小学校就学へ向けて、園と保護者がより良い連携ができるよう、附属学校特別支援教育コーディネータの立場からお話しできたことは、とても有意義だった。

小学校では、引き続き個別の教育支援計画を作成している児童の保護者との面談がスムーズにいつている。家庭環境に配慮の必要な件では、担任と情報共有しながら、保護者が安心して子育てができるよう、一緒に考えていくことができた。ケースによっては、保護者の困り感、子育てへの悩み等は、スクールカウンセラーとも連携しながら対応している。

2 今後の取り組みと課題

- (1) これまでも、幼稚園と小学校の連携は連絡会などを通して行われてきた。特に、年長児がスムーズに小学校生活に慣れていけるよう、配慮の必要な幼児の実態やこれまでの経過等を情報共有するのは大切なことである。今後も、コーディネータが実際に学級に入りながら観察し、かかわり、成長を見届けていくことが大切と考える。
- (2) 小学校の児童の様子から、個々の多様性に今後どのように配慮し、支援していくのか明確にしていくことが課題と思われる。集団生活は今後社会に出る子どもにとっても切り離せないことである。個々を大切にしながらも、社会でうまくかかわっていくための技能やルール作りを具体的にどこまで児童に求めていくのか、日々悩むところである。より一層、保護者と共に考えていく時間が必要で、時間をかけて解決していくことが必要である。

令和3年度の活動を振り返って

英語教育コーディネータ 佐藤 大将

1 今年度の活動の報告

(1) 小学5・6年生における「外国語科」の授業

今年度も、「外国語を通じて、自ら関わりながら相手や他者とつながろうとする子ども」の育成を目指し、子どもにとってコミュニケーションを図る必要感のある目的・場面・状況の設定について、新たな可能性を模索してきた。

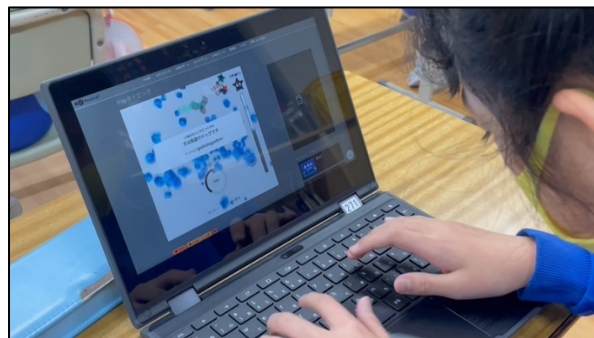
6年生では、外国語科と総合的な学習の時間を関連付けた授業づくりに挑戦した。山形市と連携し、「山形市ホストタウン子どもサミット」というプロジェクトを立ち上げ、サモアの小学生とオンラインでの交流を行った。日本や山形の魅力を伝えるために、必要な語彙や表現を主体的に学ぶ姿が見られた。新聞社やテレビ局も取材に訪れ、本校の取り組みを校外へ発信することができた。



(2) 小学3・4年生における「外国語活動」の授業

文部科学省作成の副読本「Let's Try!①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。5・6年外国語科、中学校英語科との系統性を意識しながら、コミュニケーション能力の素地を養うために、様々な言語活動に取り組んだ。9月には、多くの教育実習生と共に外国語活動の授業づくりを行い、実際にTTで授業を行った。大学生の柔軟な発想力に刺激を受けながら、新たな教材開発に取り組むことができた。

また、1人1台端末を活用し、アルファベットの学習とタイピング練習を関連付けた活動を続けて行ってきた。子どもたちは、ローマ字と英語を比較し、綴り方の違いに気付くことができた。そして、様々な学習アプリを使って、楽しみながらタイピング技術を身に付けることができた。



(3) 小学1・2年生における「英語遊び」

「幼小中の12年間を見通した英語教育カリキュラム」の構築に向け、小学校低学年における「英語遊び」の授業を行った。子どもたちは、ALTによる絵本の読み聞かせや英語を使ったゲーム、自己紹介などを楽しみながら、英語に慣れ親しむことができた。来年度も、3年生から始まる外国語活動とのつながりを意識しながら、指導内容やカリキュラムを更新していきたい。



(4) 幼稚園における「英語遊び」

8月、附属幼稚園にて、山形大学の学生による英語遊びが行われた。「遊びを通して英語に慣れ親しむ」をコンセプトに、幼稚園の子どもたちが、楽しみながら英語に触れることができるような活動を設定した。英語の歌に合わせて体を動かしたり、先生の真似をして英語を話してみたり、自分の好きなスポーツを友だちと伝え合ったりした。新聞社やテレビ局も取材に訪れ、附属学校園の取り組みを学外へ発信することができた。

2月には、年長の子どもたちを附属小学校の外国語ルームに招待し、英語教育コーディネータやALTと一緒に授業を行う予定だったが、コロナウイルスの影響で中止となってしまった。来年度は実施できるように、附属幼稚園の先生方と連携しながら準備を進めていきたい。



(5) 中学校との連携

今年度も、コーディネータが中学生の授業に参加したり、授業研究会に参加したりすることを通して、小中連携の新たな可能性について話し合うことができた。このように、小中を通して目指す子どもの姿について議論し、授業を見合ったり、一緒に授業づくりを行ったりしていくことが、小中連携において極めて重要であると考えている。そして、附属学校の小中連携の取り組みを、他校に広めていきたい。



(6) 全国英語教育研究大会での授業実演発表

1月に行われた全国英語教育研究大会において、小学校の部の授業実演者として発表を行った。山形大学の佐藤博晴先生をはじめ、県内外の様々な先生方からご指導をいただきながら授業づくりを行い、本校の取り組みを全国に発信することができたと感じている。大会2日目の分科会では、全国の先生方と小学校外国語教育で大切にしていきたいことについて議論し、本校の取り組みについて様々な助言をいただくことができた。



2 成果(○)と課題(▼)

- 全国大会や公開研究会などを通して、附属学校園における英語教育の取り組みを発信することができた一年だった。今後も「山形大学附属学校園の英語教育」の取り組みを県内外に発信していきたい。
- サモアの小学生との交流など、外国語と他教科の学習を関連付けた授業づくりに取り組むことができた。来年度も、教科横断的な単元づくりの新たな可能性を模索していきたい。
- 幼小中の12年間を見通した英語教育カリキュラムの構築に向けて、附属幼稚園や小学校低学年の子どもたちと授業を行うことができた。
- Web会議システムや学習アプリの活用、動画撮影など、ICTを効果的に活用しながら授業づくりを行うことができた。
- ▼ 今年度実施できなかった幼稚園での英語遊びについて、来年度に向けて準備を進めていきたい。
- ▼ 小中連携について、教員同士の連携に加え、子ども同士がつながることができる単元を構想し、その取り組みを他校に発信していきたい。

幼小連絡会 ねらいと年間計画

(1) ねらい

・新1年生の学習や生活の様子を観察を通して、各児童の検討していきたい面や今後の課題について共通理解を図りながら、見通しをもつことができるようにする。

(2) 計画

期 日	場 所	窓 口	内 容	附小担当	附幼担当
5月11日	附小	附小	第1回幼小連絡会 （附幼・一般） 1年生の児童の学習の様子を幼稚園教員が参観し、その後全体で話し合いをして情報交換をする。	教務 教頭	教務
11月18日	附幼	附幼	第2回幼小連絡会 小学校教員（1年担任・校長・教頭・教務・教務副・養護教諭）が幼稚園児の活動を参観し、それらをもとに幼小の学びや育ちについて共通理解を図る。	教務 教頭	教務
12月10日	附小	附小	幼小交流会① 1年生のフェスティバルに年長児を招待し、参観してもらう。	井上	伊藤
1月24日 ※新型コロナ 感染拡大防止 のため中止	附小	附小	幼小交流会② 生活科などの1年生の学習の様子を見学したり、一緒に活動に参加したりする。	井上	伊藤
2月15日 ※新型コロナ 感染拡大防止 のため中止	附小	附小	第3回幼小連絡会 1年生並びに年長児に関わりある幼稚園担当が小学校1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務 教頭	片山
2月18日	附小	附小	幼小リモート交流会③ 小学校の学習や生活についての紹介をビデオレターで行う。また、Zoomを使ってペアで会話などの交流を行う。	1年担任	伊藤
2月21日	附小	附小	新入児情報交換会 （一般） 一般園の年長児に関わりある教員が1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務副	なし

第1回幼小連絡会 報告

- 1 ねらい 1年生の学校生活の様子をもとに、幼小ともに子どもたちへのよりよい支援のあり方を考える。
- 2 日時 令和3年5月11日（火）
- 3 場所 山形大学附属小学校 各教室・会議室
- 4 参加者 小学校・・・樋口校長・森山教頭・芦野教務・長岡副教務・鈴木養護教諭
1年生担任（井上教諭・成澤教諭・青柳教諭）
幼稚園・・・林園長・片山教務・奥山養護教諭・前年長児担任（那須教諭）
早坂特別支援コーディネータ・鎌田メンタルケアコーディネータ
小林学習支援員
- 5 内容 (1) 小学校の学習参観 5月11日（火）2校時
(2) 協議会（16：00～17：00）
 - ① 新1年生の様子について
 - ・ 学年経営および新年度の学校生活について
 - ・ 学級の様子について
 - ② 今後の幼小連携について

話し合いの様子（一部抜粋）

【小学校より】

- ・ 小学校では、スタートカリキュラムを設定し、どの子にとっても安心して小学校生活が始められるように段階的に学習を工夫している。小学校に入って一からのスタートではなく、幼稚園からの学びや経験をもとに、子どもたちが自信とワクワク感をもって学習できていると感じる。

【幼稚園より】

- ・ 体調面で不安を抱えているなど、小学校生活に適應できるか心配な児童もいたが、教室で他児童と元気に学習している様子が見られてよかった。担任だけでなく、養護教諭や担外とも、その子についての情報交換を行うことで、受け入れ体制がしっかりし、安心して生活できていると感じた。

6 成果と課題

- 園児のよさや特性を共有することで、細かな対応が可能になり、それが安心した生活につながっていくと実感している。
- 幼稚園から小学校へと学びの場が変わっても、その子を囲む友達や教師が温かくかかわっている様子が参観を通してわかり、子どもたちの成長の様子を継続して捉えていくことができるという点で交流会や情報交換会は有意義な時間であると思う。

第2回幼小連絡会 報告

- 1 ねらい 年長児の育ちについて情報交換し合い、幼小連携を深める。
- 2 日時 令和3年11月18日（木）
- 3 場所 山形大学附属幼稚園 遊戯室
- 4 参加者 小学校・・・樋口校長・長岡主幹教諭・芦野教務主任・鈴木養護教諭
1年生担任井上教諭・成澤教諭・青柳教諭
幼稚園・・・林園長・3歳児担任伊藤恵教諭・4歳児担任山川教諭
5歳児担任伊藤真教諭・奥山養護教諭
特別支援コーディネータ・・・早坂教諭
- 5 内容 (1) 幼稚園の保育参観 11月18日（木）（9:00～13:30に適宜）
(2) 協議会（15:45～16:45）
 - ・1年生の様子について
 - ・5歳児の様子について
 - ・幼小連携の充実にむけて（今後の交流活動の予定確認）

話し合いの様子（一部抜粋）

【5歳児担任より】

12月上旬に行われるステージフェスティバルに向けて、子どもたちと話し合いを繰り返しながらストーリーづくりを重ねているところである。友達になかなか思いを伝えられない子どももいるので、伝えられるよう後押しをしたり伝え方を教えたりしながら進めている。遊びでは、子どもたちの中から発想が生まれてきて、自分たちで必要なものをつくりながら友達と一緒に楽しむ姿が見られる。

【小学校の先生方より】

- ・子どもは、互いの遊びをよく見ており、楽しそうなどころには子どもが集まるのだと感じた。先生は、子どもの思いが実現できるように友達とつなげる援助をしたり、やりたい思いを引き出すような環境づくりをしたりしているのだと思った。
- ・子どもたちの自由な遊びの中から、ステージフェスティバルのストーリーにつながっているのだと感じた。
- ・学年の活動の中で、切り替えが苦手なため活動になかなか参加できない子どもがいた。先生は指示を出さずその子どもの様子を見守る姿勢だった。「〇〇するんだよ」というような子どももおらず、自然な流れの中で子どもが誘う姿が多く見られた。これまでの体験の積み重ねがあってこそその姿だと感じた。

6 成果と課題

○小学校の先生方に保育を参観していただき、具体的な姿をもとに話し合うことができた。特に、就学を控えた5歳児を中心に、どのような願いをもって保育しているか、今現在どのような育ちが見られるのかを小学校の先生にお伝えすることで、幼小の教師間で子どもの見とり方を交流するよい機会となった。

▼アプローチカリキュラムの見直しや充実に努め、小学校スタートカリキュラムと併せて相互理解しながら、今後も特色ある附属学校ならではの幼小連携を進め発信していきたい。

幼稚園年長児と小学校第1学年児童との交流活動

1 ねらい

幼稚園

附属小学校1年生との交流活動を通して、小学校や1年生に親しみをもって関わり、入学後の生活や学習への期待感をもつ。

小学校

附属幼稚園の年長児との交流活動を通して、年長児の気持ちを考えながら行動したり、今年1年間の自分の成長を自覚したりする。また、特定の年長児とのかかわりを通して、次年度のなかよしペアの活動への期待を高めたり、具体的なかかわりの見通しをもったりする。

2 日時

(1) 令和3年12月10日(金) れんぎょうフェスティバル参観

(2) 令和4年1月24日(月) 交流活動・給食準備見学 →中止

(3) 令和4年2月14日(月) 学習参観・交流活動 →中止



※ (2)(3)が中止になったため、年長児にビデオレターを贈ったり、Zoomを使ってお話ししたりする「リモート交流」に変更した。

3 場所 附属小学校・附属幼稚園

4 参加者 附属幼稚園年長児30名、附属小学校第1学年児童101名

5 活動内容

<p>(1) れんぎょうフェスティバル参観 (12月10日)</p>	<p>れんぎょうフェスティバルへの招待メッセージを、ビデオレターで年長児へ贈った。当日のフェスティバルでは、1年生が行う「スイミー」の劇を、体育館で年長児に見てもらった。数日後、年長児から感想が届いた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>(2) ビデオレターのプレゼント (2月中旬)</p>	<p>1年1組は「小学校の一日」、2組は「小学校の一年」、3組は「小学校のいろいろな教室」を紹介するビデオレターづくりに取り組んだ。クラスごと撮影し、その後一つの映像にまとめ</p>

	<p>て、年長児へ贈った。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
<p>(3) Z o o mを使 っての交流 (2月18日)</p>	<p>Z o o mを通して自己紹介し合った。また、年長児が「小学校で楽しみなこと」について話したり、年長児からの質問に1年生の子どもたちが答えたりする時間を設けた。</p>

6 成果 (○) と課題 (▼)

幼稚園

- 事前にビデオレターをもらい、フェスティバルを楽しみにしていた年長児。自分達も幼稚園でのフェスティバルを経験していたことから、「小学校でも広い体育館で楽しいことができるんだ!」と目を輝かせながら鑑賞していた。「プレゼントを持っていきたい」と折り紙を準備していた年長児もいて、鑑賞後直接1年生に渡す機会をもらった。大きな声でのびのびと表現する1年生の姿に、「あんなふうになりたい」という憧れを抱き、入学をますます楽しみにしている様子だった。
- 直接の交流はできなかったが、例年行われている給食試食会を年長児のみで実施することができた。小学校で調理してもらったものを幼稚園に運び、給食を食べたり配膳や片付けをしたりした。実際に経験してみることで、小学校での生活について見通しをもつきっかけとなったようである。

小学校

- フェスティバルでは、年長児が劇を見てくれることを1年生の子どもたちはとても喜んでいて。当日も「小学生らしいところを見せたい。」「かっこいいところを見せたい。」とやる気をもって演じることができた。年長児から「うたっているところ、わたしもおどりたくなかった!」「ひとであんなにおおきなさかなができるなんてびっくりしたよ。」という感想が届き、子どもたちの達成感はさらに大きくなったと思われる。
- 交流活動が中止と決まる前、子どもたちからは「小学校のことをいろいろ教えていな。」「安心してもらいたいな。」という声が聞かれた。直接会っての交流活動はできなくなったが、ビデオレターづくりにも同じような思いをもって取り組むことができた。
- 1年生の子どもたちは、自分たちが行ったことに対して年長児からお手紙が届き、つながりを感じていた。例年のような交流活動ではなかったが、子どもたちが年長児とのつながりを感じられたことをうれしく思う。年長児が小学校に入学したら、直接かかわることができるだろう。2年生になった子どもたちがどんな姿を見せるのかとても楽しみである。

園児と中学生の交流学習

1 ねらい

(中学校)

- ・幼児との遊びや会話などを通して幼児に親しみを持つことができる。
- ・幼児と楽しく交流する方法を工夫し、ふれあいの楽しさを味わうことができる。
- ・幼児との会話や遊びから、幼児の興味・関心の傾向をつかむことができる。

2 日時	令和3年10月27日(水)	9:00～9:30	<3年1組>
		10:00～10:30	<3年2組>
	10月28日(木)	9:00～9:30	<3年3組>
		10:00～10:30	<3年4組>
	11月1日(月)	10:00～10:30	<学習室>

3 場所 山形大学附属幼稚園

4 参加生徒 附属中学校 第3学年 134名

5 活動内容

(1) 幼稚園の4クラス(年長1, 年中1, 年少2)に男女8～9人ずつ分かれて入り、園児と交流した。

(2) 遊び

- ①園庭：鬼ごっこ、かけっこ、砂遊び、鉄棒、ままごと、遊具遊び、草木遊び
- ②室内：工作、折り紙、お絵かき、ままごと、フラフープ、絵本の読み聞かせ

(3) 事前学習

- ①幼児の心身の発達の特徴に応じた関わり方について学習し、幼児と楽しく交流するための工夫を考えた。
- ②幼児と交流する際の約束や注意点を確認した。

6 成果(○)と課題(▼)

○「幼児と遊ぼう！」という題材で授業を進めた。幼児と交流するためには事前の準備が必要だという生徒の発言から、生徒達は自ら計画を立て学習に取り組んできたため、交流当日は積極的に幼児に関わろうとする生徒が多く見られた。また、幼児との望ましいかかわり方について幼稚園の先生に質問する生徒もいた。

○交流後、幼稚園の先生方から生徒の様子を具体的にお聞きすることができ、その後の指導に役立てることができた。

▼今後、交流学習の回数を増やしたり、さらに交流を深めたりできるような取り組みを検討していきたい。



幼稚園児による中学校運動会参観

- ねらい
幼稚園：年中児が年少児をリードしながら活動し、互いに親しみをもつようになる。
中学生のお兄さんお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。
- 日時 令和3年7月9日（金）
- 場所 山形大学附属中学校グラウンド
- 参加者 年少児うめ・もも組26名 年中児りんご組19名
引率：伊藤恵・片山・山川・山下・千葉・小林
- 内容 中学校まで年少中ペアになって徒歩で往復し、運動会の様子を見て応援する。
- 次年度に向けて
年中児は、年少児の面倒をみながら中学校までの道を案内することで、上級生としての意識が芽生え、異年齢での関わりに期待感をもてるような出会いとしたい。また、中学生が運動会の各競技に熱心に取り組む様子を目の前にし、自然に声援を送り運動会を楽しむと共に、中学生に親近感をもちその後の家庭科の保育交流に繋げていきたい。

中学生による幼稚園運動会手伝い

- ねらい
幼稚園：中学生のお兄さんやお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。
中学校：幼稚園運動会ボランティアを通して、幼児との関わりを学び主体的に運営を手伝う。
- 日時 令和3年9月18日（土） 8：30～12：00
- 場所 山形大学附属幼稚園
- 参加者 ボランティア希望の3年生 引率 教頭
- 内容 ・園児指導、世話 ・競技の試技、補助 ・道具などの準備、片付け
- 次年度に向けて
今年度は、9月18日（土）の運動会が雨天のため平日に延期となり、中学生のボランティア受け入れが叶わなかった。例年、中学生の園児に対する温かい対応や、競技運営への積極的な参加が見られ、運営する上でも貴重な人手となっている。また、園児と中学生の触れ合いだけに終わらず、保護者の方に附属学校園の最上級生である中学生の姿、その中学生と園児との交流を見ていただく貴重な機会となっている。来年度は、近年コロナ感染症拡大防止のため中止となっている中学校運動会の応援も再開し、幼稚園運動会への中学生ボランティアの参加を募り、中学生と園児との交流を重ね、子どもたち同士、また学校園間の連携の一つとして継続していきたい。

「小中合唱交流会」

1. ねらい：音楽を通して、附属の小中学生がともに過ごすことで、つながりを感じたり互いの様子を理解したりする。

2. 目標

附中生の目標

来年ともに生活する後輩に、歌を通してメッセージを送ることで、よりよい附中をつくっていかうという意識を高める。

附小児童の目標

来年ともに生活する先輩との出会いを通して、今の自分を見つめ、新しい生活への意識を高めることができる。

3. 日時・場所 ※新型コロナウイルス感染症対策の対応のため設定せず

4. 音楽交流会の次第

進行 附中生徒

1. 開会のことば
2. 中学校 合唱コンクール優秀クラスの発表
3. 中学生の合唱発表
4. ともに歌おう 「翼をください」
5. 感想発表
6. 閉会のことば

5. 当日の動き

- | | | |
|--------|-----|---------------------|
| 13:15～ | 附小生 | 附中体育館に移動 |
| 13:20 | 附中生 | 六稜ホールで練習
(20分ほど) |
| 13:40 | 附中生 | 体育館へ移動 |
| 13:50 | | 開会 |
| 14:20 | | 閉会 |

6. 次年度へ向けて

例年であれば、上記のような内容で交流を行っていたが、今年度も新型コロナウイルスの影響により、合唱交流会は実施しなかった。その代替えとして、合唱コンクールの様子を撮影した動画を小学6年生に鑑賞してもらい、感想を送ってもらった。鑑賞してもらったのは、中学3年生の4クラスの合唱である。以下に小学6年生の感想を掲載する。

- 歌を歌うことがすきなので、「こんな合唱がしたい」と感じました。女声は美しく響いていて、男声は迫力があり、聴いていてとても楽しかったです。
- 小学校と比べて男女の声がはっきり分かれていた。高音と低音がきれいにハモっていて、とても素敵でした。
- 3歳年齢が上というだけで、こんなにもきれいさに差が出るとは思ってもいませんでした。

これらの感想から、来年ともに生活する先輩との出会いを通して、今の自分を見つめ、新しい生活への意識を高めるという小学校の目的は達成できたのではないかと考える。しかし、中学生にとっては、生徒主体でこの交流会のためになにか取り組んだわけではないので、「歌を通してメッセージを送り、よりよい附中をつくっていかうという意識を高める。」という中学校の目的は達成できていない。今後も、声を出して歌うことや一つの場所に大勢集まって合唱することに制限があることを考えると、合唱による交流会は難しいと思われる。合唱の様子を録画し合い互いの学校で鑑賞し合い感想を伝えることもできなくはないが、小学校の目的は達成できても、中学校の目的を達成するのは難しい。現在、附属小学校の6年生は、中学校の授業の様子や部活動の様子を見学に来ている。その活動を中心に連携を考えていってもいいのではないかと考えている。

幼稚園と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

特別支援学校の友達や先生と一緒に遊び、親しみをもつようになる。

特別支援学校小学部

幼稚園の友達や先生と遊ぶことや、気持ちを伝えるなど活動を共にすることを通して、経験を広め、友達と共に活動することのよさや活動の面白さに気付く。

2 参加者

幼稚園 年少児 26名

特別支援学校 小学部 1組児童 5名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第1回	6月29日(火) 10:00～11:15	幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園の園庭の滑り台や砂場、築山などの遊び場で遊んだり、木の実や小石などを食べ物に見立てて、ごっこ遊びをしたりして、一緒に遊ぶ活動を通して交流した。
	6月30日(水) 10:00～11:15		
	7月1日(木) 10:00～11:15		
第2回	11月18日(木) 10:00～11:15	特別支援学校	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校で作った手作りこまを紹介して、コマ回しをして交流した。 第1回と同様に、幼稚園の園庭で一緒に遊んで交流した。 幼稚園で栽培した大根を収穫したり、焼き芋を一緒に食べたりする活動を通して交流した。
	11月19日(金) 10:00～11:15		
	11月22日(月) 10:00～11:15		
第3回	1月27日(木) 10:30～11:10	オンラインで実施	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校でしている風船バレーを紹介した。 お互いに踊っているダンスを紹介し、画面越しに一緒に踊った。 交流会で楽しかったことを発表した。
事前事後の学習	<p><幼稚園></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習として、全園児が通る玄関ホールや保育室に支援学校の友達の顔写真と一緒に遊んだ際の写真、支援学校の友達からの手紙やポスターを掲示した。交流の際に遊んだことを思い出したり、友達が幼稚園に遊びに来てくれることへの期待感が高まったり、交流への見通しをもつことに繋がっていた。 保育者や友達と一緒に支援学校の友達と遊んだことを話し合ったり、写真を見ながら一緒に遊んで楽しかったことを思い出したりして、うれしかった気持ちや次回への期待を手紙や作品で伝えるようにした。 <p><特別支援学校小学部></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習では、昨年度や前回の交流の様子を写真で見ながら、遊び場や活動の流れを確認した。幼稚園の友達に、簡単な手紙を書いたり、手作りコマを作ったりなどして交流会への期待を高めるようにした。 事後学習では、写真を見ながら交流会の様子を振り返り、幼稚園の友達に向けて手紙を書いて気持ちを伝えるようにした。 		

4 成果（○）と課題（▼）

幼稚園

- 園庭のいろいろな場所で展開されている園児の遊びに、支援学校の友達が自然に加わる場面が数多く見られた。園児達も友達が遊びに来てくれたことに喜びを感じており、自分達の遊びに園の友達と同様に受け入れ遊んでいる様子だった。子どもたちが自分で選択し主体的に遊び、関わる姿が印象的であった。
- 子ども同士が同じ道具をもち、同じ行為をしながら連れ立って歩くなど、呼応し楽しんでいる姿が見られた。大人が介入しない子ども同士のコミュニケーション力の素晴らしさを感じた。
- 同じ道具で遊ぶ、同じものを食べる等、ものを介しての自然な関わりが多く見られた。2回目の交流の際、支援学校の子どもたちが園児を思いつくってくれたコマを介して、交流の導入を設定してもらったことがその後の交流に生きていた。年少児と支援学校の子どもたちが、一斉にコマ遊びをすることで一気に親近感が湧き、心の距離感が縮まったように感じた。
- 3回目支援学校訪問が叶わなかったが、オンラインでの交流を体験でき、新たな交流のスタイルを模索することができた。また、昨年度の交流の反省を受け、幼稚園の子どもたちにも感想を発表する機会をつくっていただき、友達に自分達の思いを伝えたいと思う子どもの姿があり、相手意識をもった交流にすることができた。
- ▼幼稚園で天候に左右される活動があり、交流の活動内容として位置付けていなかったものを急遽実施させていただくことになってしまった（大根掘りなど）。前日までに変更事項を連絡し、子どもたちにとってよりよい体験となるよう努めていきたい。
- ▼オンラインでの交流も可能であることがわかったが、やはり実際に対面で交流できる方が、年少児の子どもたちにとっては適しているように思われる。ただし、事前学習としてオンラインで予告、顔合わせするなど、オンラインの効果的な活用を検討していきたい。

特別支援学校小学部

- 第1回目は、幼稚園の園庭の中から、滑り台や上り棒などの大型遊具で遊んだり、幼稚園の友達の遊びを見て、梅の実や木の葉など自然の素材を食べ物に見立てて遊んだりする様子が見られた。
- 第2回目は、特別支援学校でしている活動を紹介する中で、自分のことを得意げに見せる様子が見られた。前回よりも幼稚園の友達が遊んでいる遊び場に、自分から向かい、ままごと遊びをしたり、一輪車を押して一緒に物を運んだりして、共に遊ぶ様子が見られた。
- 第3回目は、オンラインでの活動になったが、自分たちがしている風船バレーを実演して伝えたり、幼稚園と特別支援学校とそれぞれが踊っている踊りを紹介したりした。画面を通して、意欲的に踊ったり、紹介の様子をじっと見たりする様子が見られた。感想発表では、「風船バレーをがんばった。」「鬼のパンツが楽しかった。」など自分の気持ちを伝えることができた。
- ▼コロナ禍により、オンラインを活用した交流会も実施したが、生活年齢や実態から、直接の交流の方が効果的だと感じられる場面もあった。事前事後学習などでやり取りするなど、計画的にオンラインの良さを活用していけるとよい。
- ▼児童によっては、幼稚園の園庭で遊ぶことが目的になり、幼稚園の友達と共に遊んで交流することまで結びつきにくい場面が見られた。交流及び共同学習のねらいに立ち返りながら、異学年集団との交流会の在り方について検討し、双方の幼児児童にとって、経験や人間関係を広げる活動となるようにしていきたい。



幼稚園と特別支援学校高等部の交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

- (1) 買い物、作業見学を通して、特別支援学校高等部の生徒と触れあい、親しみをもつ。
- (2) いろいろな製品の中から100円以内で自分の買いたい物を選んで買う。
- (3) バスの乗降の仕方、乗車の決まりを知る。

特別支援学校

- (1) 幼稚園児への作業活動や販売活動を通して、人とのかかわりや販売のつながりが分かる。
- (2) 相手や周りの状況に合わせて活動したり、自分の役割を工夫したりして、作業活動や販売活動に取り組む。
- (3) 責任感をもって、自分の役割に取り組む。

2 日時 令和3年12月16日(木) 10:10～11:40

3 場所 山形大学附属特別支援学校 多目的室、各作業室

4 参加者 附属幼稚園 年中児18名、 附属特別支援学校 1、2、3年生 20名

5 内容

- (1) 作業学習で制作した製品の販売と購入。各作業グループの作業紹介と見学。
- (2) 幼稚園で使用している作業製品のメンテナンスと作業見学。

6 成果(○)と課題(▼)

幼稚園

○園児にとって自分でお金を握りしめ、欲しいものを選択して買い物をさせていただく経験は本当に貴重な経験である。自分のため、家族のためを思って買い物する姿は微笑ましく、高等部の先生方、生徒の皆さんの温かな対応や心配りのおかげで、伸び伸びと買い物を楽しませていただいた。

○幼稚園で使用しているベンチなどを修繕する様子を見せてもらい、本格的な機械を使って作業する生徒さんの姿に目を見張っていた様子である。修繕していただいたベンチには、生徒の皆さんの作業する写真や感想が貼られ、見学させていただいた光景が蘇ってくるようであった。年中児は「ぼくたちが、見てきたんだよ」とでもいうように、張り切って各保育室に修繕の済んだベンチを運んでいた。

▼昨年度より園児数が減少し、買い物に有する時間と、作業見学に有する時間に差ができてしまった。次年度、年中児は29名となる予定のため、時間差ができにくいと思われるが、子どもの実態に合わせて、園児の待機できるような場所の確保をお願いし、待機時間の過ごし方を検討する必要性もある。

特別支援学校

○事前の準備では、園児が欲しいと思う物を考えながら製品のアイデアを出し合ったり、色合いやデザイン、価格を考えたりしながら製品の準備に取り組むことができた。

○当日のバザーでは、園児と視線を合わせて製品について話したり、お金の出し方を教えたりと園児を思いやった自然なかかわりが見られた。

○各グループの作業紹介では、園児たちに分かりやすく伝えるために、道具や作業方法の説明をする生徒、作業をして見せる生徒など、自分の役割に進んで取り組んだ。園児が興味津々に作業の様子を見ながら質問する様子を受けて、嬉しそうに受け答えする姿もあった。

○幼稚園で使用しているベンチのメンテナンスでは、昨年よりも多くの製品を持ってきていただいたことで、生徒たちがやりがいを持って取り組むことができた。

小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

小学校

ペアの児童や学級で一緒に活動することを通して、気持ちや考えを感じ取ろうとしたり、伝えたりしてコミュニケーションをとろうとする素地を育てる。

特別支援学校小学部

小学校のペアの友達と様々な活動を通してかかわり、自分の気持ちを伝えたり友達の気持ちを聞いたりして伝え合いながら、一緒に活動する楽しさを知る。

2 参加者

小学校 複式学級 3、4年児童 12名

特別支援学校 小学部 3～6年児童 12名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第1回	5月13日(木) 10:30 ～11:30	特別支援学校	「ともだちをしろう①」 ・学級ごとの自己紹介 ・ペアの児童同士の顔合わせ ・ペアの児童同士での自由遊び(トランポリン、ボッチャ、ボール遊び等)を行った。
第2回	6月22日(木) 10:30 ～11:30	特別支援学校	「ともだちをしろう②」 ・小学部2組、3組の企画として、リズムダンスを行った。 ・ペアの児童同士での自由遊びを行った。 ・振り返りで楽しかったことを共有した。
第3回	10月5日(木) 10:30 ～11:30	特別支援学校	「ともだちとなかよくなろう①」 ・小学校の企画遊び(2組もぐらたたき、3組ペットボトルボウリング)を行った。 ・ペアの児童同士で自由遊びを行った。 ・振り返りで楽しかったことを共有した。
第4回	12月2日(木) 10:30 ～11:30	特別支援学校	「ともだちとなかよくなろう②」 ・前回の反省を踏まえ、よりペアで仲を深められるよう小学校の企画遊び(2組ボール運びリレー、3組魚釣りゲーム)を行った。 ・ペアの児童同士で自由遊びを行った。 ・振り返りで楽しかったことを共有した。
第5回	1月25日(火) 11:00 ～11:30	オンライン で実施	「ともだちとのかかわりをふりかえろう」 ・小学部のクラスごと Zoom での交流を行った。 ・小学校が進行し、小学校では4回までの交流を振り返ってスライドにまとめ発表した。 ・小学部はこれまでの交流会で楽しかったことを中心にペアに向けての発表を行った。
事前事後の学習	<p><小学校></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習として、昨年度作ったペアの「好きなこと」や「仲よくなるコツ」を書いた「ペアブック」を読む時間を設けた。また、4年生の昨年度の経験を共有し、活動への期待感と見通しをもつことができるようにした。 毎回の振り返りを書き溜め、次につながる交流を目指して計画を立てた。 <p><特別支援学校小学部></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習として、学級ごとにペアの友達や前回の活動の様子の写真を見ながら交流会について確認した。ペアの友達とどんなことをして遊びたいかを考えたり、企画遊びの見通しを持ったりしながら、次回の交流への期待感を高めたりした。 事後学習では、写真を見ながら交流会で楽しかったことなどについて振り返り、ペアの児童に向けた手紙を書いて気持ちを表した。 		

4 成果（○）と課題（▼）

小学校

- 3年生にとっては初めての体験となるため、始めは不安な様子も見受けられたが、昨年度の様子を楽しそうに話す4年生の姿を見て、期待感をもって交流活動を始められた。第1回の交流会では、3年生は少しびっくりした様子も伺えたが、回を重ねるごとにペアの児童への話しかけ方や得意なことを理解して接することができるようになった。
- 小学校が担当する企画遊びでは、3回目が「相手に楽しんでもらう」ことを念頭に置いて計画をしていたのに対し、4回目は「ペア同士で楽しみ、仲を深める」ことをテーマとして計画を行った。信頼関係を築く上で、「～してあげる」ではなく、「一緒に楽しむ」ことが大切であることを学ぶことができた。
- 第5回目はオンラインでの開催となったが、これまでの思い出を丁寧に振り返ることができた。1回目から4回目までを振り返る中で、ペア同士の仲の深まりや自分の関わり方の変容に気付くきっかけとなった。
- ▼最後の会がオンラインということもあり、準備を万全にできる状態であった。しかし、準備を整えるからこそ、自然発生的な交流が難しかったり、型にはまり淡々としたスライド発表になってしまったりする児童も見受けられた。

以下の2つは、交流会の振り返り（一部抜粋）である。これらから、信頼関係の大切さや自分自身の成長に気付くことができていることが伺える。

前回の交流会では上手く遊ぶことができなくて、自分と遊んでも楽しくないのかなど不安な気持ちになりました。でも今日は、計画していたことは大きくなりましたけど、ぼくの好きな動画を〇〇さんも見てくれて、話してもできてうれしかったです。相手を知るのも大切だけど、自分のことも伝えられることも大切だと感じました。（4年児童）

わたしは、最後のズームで悲しくて声がうまく出せませんでした。〇〇さんともっと仲良くなればよかったと思います。交流会だけでなく、コロナが終わって、本当の交流ができるようになるといいなと思います。今の自分なら、もっと仲良くなれると感じます。（3年児童）

特別支援学校小学部

- 5回の交流会のうち、1・2回目は、小学校のペアの友達を知るねらいから、自己紹介や小学部で踊っているダンス、自由遊びといった流れで活動した。自由遊びは、本校児童が普段している遊びや、学習でしている遊び場を設定した。そうすることで、本校児童が自然に遊ぶ中で、ペアの友達とのスムーズな遊びやかかわりに発展するきっかけになった。
- 3回目の交流会からは、小学校の友達が企画した遊びで活動した。どの企画遊びも、一緒に取り組んで楽しむことを想定したのになっており、回を重ねるごとに、一緒に活動を楽しむ様子が見られ、ボールを運んだり、マグネットで魚を釣ったりして笑顔多く活動することができた。
- 昨年度は回数を少なくしての交流会であったが、今年度は例年通り5回実施することができた。交流会や事前・事後学習でかかわりを重ねるごとに、ペアの友達のことを覚え、名前を読んだり、自分から誘ったりするようになった。5回目の交流会は、オンラインでの交流会になったが、画面を通してでも、名前を読んだりじゃんけんをしたりして、これまでの交流会と同様に児童同士がかかわる場面が見られた。
- ▼コロナ禍により、活動内容や活動場所を一部制限しながらの実施となった。特別活動、特に交流及び共同学習のねらいに立ち返りながら、交流会の在り方について検討し、双方の児童にとって経験を広げたり、社会性や豊かな人間性を育んだりすることのできる交流及び共同学習となるようにしていきたい。



附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

1. ねらい

- (1) 附属中学校の生徒と一緒に活動することや活動内容が分かる。
- (2) 附属中学校の生徒と保健体育のダンスを通して、音楽に合わせて身体を動かす楽しさや一緒にダンスをする喜びを感じ、それを表情や身体などで表現しながら活動する。
- (3) 同年代の友達と一緒に活動する楽しさを感じながら、相手に関心を持ったり自分からかかわろうとしたりする。

2. 日 時

令和3年 9月24日（金） 13：30～14：20

※新型コロナウイルス感染症拡大状況を踏まえ、学習活動等の変更により未実施

3. 場 所

附属中学校 体育館

4. 参加生徒

附属特別支援学校中学部 附属中学校1年生

5. 活動内容（計画案）：テーマ「ダンスを楽しもう 一緒に踊ろう」

今年度は、保健体育科のダンスの活動と一緒に計画をしていた。内容は、単元の前半はそれぞれの学校でダンスの授業に取り組み、交流当日は中学校と特別支援学校一緒の小グループを作って16拍程度の短いダンスを考え、グループごとに発表し合う内容だった。グループ内で互いに自己紹介をし、自分の考えた表現を伝えたり友達の動きを認め合ったりして、ダンスの教科のねらいだけでなく、お互いを理解しながら取り組むことや協力することなどもねらって活動を考えていた。また、互いの学校でそれまで取り組んできたダンスの授業内容について紹介をし、最後に感想を発表し合うという予定だった。

6. 次年度へ向けて

今年度は、互いの学習の成果を発表し合うだけでなく一緒にダンスを作るという活動を通して教え合ったりかかわったりしながら共に学ぶことを大切にしたいと計画してきた。次年度、新型コロナウイルス感染症の拡大状況によってオンラインで交流することになっても、一つのダンスを作る上げる過程を大切に、触れ合いながら、互いに豊かな人間性を育むことができる交流を行っていききたい。学校間で話し合い、活動内容や時期について年間計画に位置づけ、早めに担当で検討し計画していききたい。

Ⅱ 山形大学附属学校 研究・連携推進委員会規程

(設置)

第1条 山形大学附属学校運営規程第8条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として、山形大学附属学校研究・連携推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(目的)

第2条 委員会は、附属学校における研究を推進し、かつ、附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第3条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項
- (2) 公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項
- (3) 附属学校間の連携の基本的方針に関する事項
- (4) 附属学校合同研修会に関する事項
- (5) 幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項
- (6) その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第4条 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- (1) 附属学校運営部長
 - (2) 附属学校運営副部長(研究担当)
 - (3) 附属学校運営副部長(教育実習担当)
 - (4) 主担当教員として地域教育文化学部配置された教員の中から選出された者 3人
 - (5) 主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者 1人
 - (6) 附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)
 - (7) 附属学校の教頭
 - (8) 各附属学校研究部長
 - (9) その他委員会が必要と認める者
- 2 前項の第4号、第5号及び第9号に掲げる委員の任期は、2年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、前条第1項第1号に掲げる委員をもって充てる。

- 2 委員長は会務を掌理し、委員会を代表する。
- 3 委員長に事故があるときには、前条第1項第2号に掲げる委員がその職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。
- 3 委員会の議事は、会議に出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
- 4 前項の場合において、委員長は、委員として議決に加わることができない。
- 5 委員長は、審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

(部会)

第7条 委員会の下に、次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

(1) 共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し、実施する。

(2) 幼・小・中連携部会

附属幼稚園、附属小学校及び附属中学校の連携について計画し、実施する。

(3) 特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し、実施する。

(事務局)

第8条 委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し、委員会運営に必要な庶務を行う。

(その他)

第9条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成28年4月1日から施行する。
- 2 次の規則は、廃止する。
 - (1) 山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成17年3月7日制定)
 - (2) 山形大学附属学校連携委員会規則(平成21年6月1日制定)

III 資料

共同研究推進部会申し合わせ

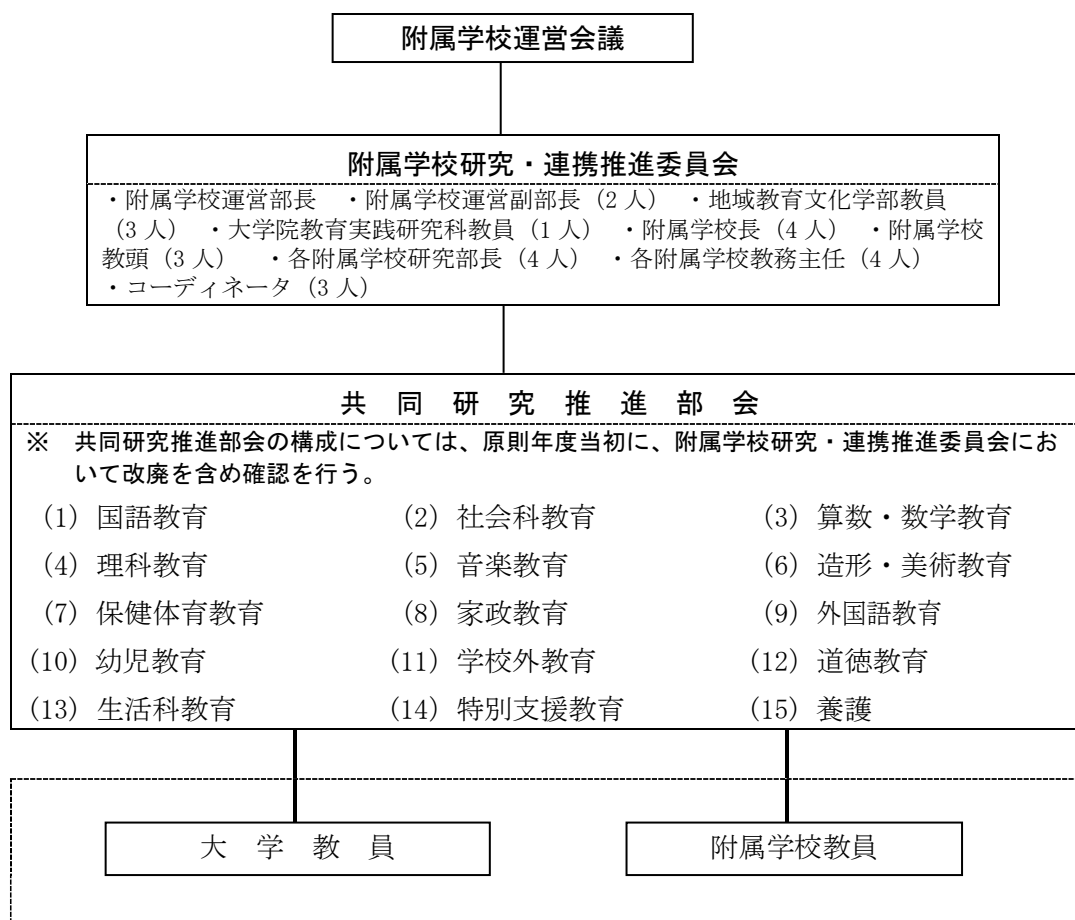
1. 目的

附属学校の重要な使命の一つとして、教育理論及びその実践に関する研究並びにそれらの実証と研究成果の地域への還元がある。これまで、附属学校は、大学と連携して附属学校研究推進委員会を設置し、その下に大学・附属学校共同研究部会を組織し、共同研究を推進してきた。

附属学校の存在意義が問われている状況の中で、平成 21 年度に附属学校研究推進委員会規則の改正を行い、大学との共同研究の更なる実質的な推進を図ってきた。

さらに、平成 28 年度には、共同研究活動及び連携活動の改善に向け、附属学校研究推進委員会及び附属学校連携委員会の 2 つの委員会を統合し、附属学校研究・連携推進委員会を設置した。

2. 大学・附属学校共同研究組織



3. 共同研究推進部会

(1) 共同研究推進部会は、大学教員及び附属学校教員で構成する。

(2) 共同研究推進部会への所属の確認作業は、原則年度初めに附属学校研究・連携推進委員会を通して行う。所属確認は附属学校の教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。

なお、地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの共同研究推進部会に積極的に所属するものとする。附属学校の教員は原則いずれかの共同研究推進部会に所属するものとする。

- (3) 地域教育文化学部以外の教員についても、共同研究推進部会員の推薦に基づいて共同研究推進部会に所属することができる。
- (4) 各共同研究推進部会は2人以上で構成し、各研究推進部会に大学教員の中から選出した部会長1人を置く。
- (5) 共同研究推進部会の設置及び改廃等に関する事項は、附属学校研究・連携推進委員会において決定する。
- (6) 各共同研究推進部会は、年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い、年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各共同研究推進部会の研究テーマは、各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや、他の主体的研究テーマとする。

4. 公開研究会

共同研究推進部会に所属する大学教員は、各附属学校の公開研究会において、指導助言者ではなく、共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

(令和3年4月1日現在)

	氏 名	現 職
委員長 (1号委員)	中 井 義 時	(附属学校運営部長)
委 員 (2号委員)	栗 山 恭 直	(附属学校運営副部長)
委 員 (3号委員)	加 藤 健 司	(附属学校運営副部長)
委 員 (4号委員)	佐 川 馨	(地域教育文化学部教授)
	野 口 徹	(地域教育文化学部教授)
	後 藤 み な	(地域教育文化学部講師)
委 員 (5号委員)	森 田 智 幸	(大学院教育実践研究科准教授)
委 員 (6号委員)	林 敏 幸	(附属幼稚園長)
	樋 口 潤 一	(附属小学校長)
	早 坂 智	(附属中学校長)
	川 田 栄 治	(附属特別支援学校長)
委 員 (7号委員)	森 山 謙 一	(附属小学校教頭)
	関 東 朋 之	(附属中学校教頭)
	片 桐 睦	(附属特別支援学校教頭)
委 員 (8号委員)	伊 藤 真由美	(附属幼稚園研究主任)
	神 保 諒 一	(附属小学校研究部長)
	大 隅 一 浩	(附属中学校研究部長)
	柴 田 雄一郎	(附属特別支援学校研究主任)
委 員 (9号委員)	片 山 敬 子	(附属幼稚園教務主任)
	芦 野 繁 樹	(附属小学校教務主任)
	金 澤 彰 裕	(附属中学校教務主任)
	近 藤 真知子	(附属特別支援学校教務主任)
	早 坂 美 紀	(特別支援教育コーディネータ)
	鎌 田 弘 子	(メンタルケアコーディネータ)
	佐 藤 大 将	(英語教育コーディネータ)

※4号, 5号及び9号委員の任期は2年 (R2.4.1~R4.3.31)

編集後記

今年度も、昨年度に引き続きコロナ禍により中止や縮小をした活動がいくつかあった。9月に予定されていた中学生の幼稚園運動会ボランティア、中学校と特別支援学校の共同学習、11月に予定されていた小中合唱交流、2月に予定されていた幼稚園でのALTの英語遊びなどである。そうした中でも、感染症対策を施しながら、オンラインでの交流なども工夫され、充実した連携活動になったようである。

また、今年度から附属学校の第4期中期目標・中期計画がスタートし、より焦点化された連携が緒についた。校種をまたいで4つ（ICT活用、インクルーシブ教育、英語教育、SDGsを踏まえた教育）のプロジェクトチームが発足している。来年度の具体的な取り組みに期待したいところである。

注目したいのは、英語教育における幼小中の12年間を見通したカリキュラム構築である。今年度から実施されている幼稚園での「英語遊び」は、提案性のある取り組みであり、幼小中を越境して活動できる英語教育コーディネータを配置している本学校園ならではの活動であると言える。

今後も、幼小中特の4つの校種を持つ附属学校園の強みを生かし、附属学校の子どもたちに未来につながる学びを提供するとともに、地域にとって意義ある教育実践を提案していきたい。

令和3年度 附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属中学校 教頭 関東 朋之

令和3年度

附属学校連携活動報告書

発行日 令和4年3月31日

発行者 山形大学

編集者 山形大学附属学校連携委員会

〒990-0023

山形市松波2丁目7番2号